

皮心伝心

分かれて久しければ必ず合し、 合して久しければ必ず分かる

タイトルは、羅貫中作「三国志演義」の冒頭の一節から採った。

話説天下大勢分久必合合久必分

(そもそも天下の大勢は、分かれて久しければ必ず合し、合して久しければ必ず分かる)

原文は中国の王朝史を振り返っての所感であろうが、これを読んでむしろ「病気の分類みたいだな(笑)」と思ったのは、筆者だけであろうか。

ある疾患Aの歴史が長く続くと、その中の細かな差異に気づく人が現れて新しい分類法を提唱する(合久必分)。その分類が人口に膾炙されるようになると、いずれ「疾患AはAだ。こんな分類に意味はない」あるいは「疾患AとBとCをまとめて統一概念を提唱する」という人が出てくる(分久必合)。

メラノーマのClark分類の観点は、臨床像(NM)・進展様式(SSM)・部位(ALM)・先行病変(LMM)とまちまちであり、どうしてこんな分類を思いついたのか、一見理解が難しい。南米の作家ボルヘスのテキストにある動物の分類*を彷彿させなくもない。あるとき、一研修医が学生に蘊蓄を垂れたつもりで「こんな分類、意味ねーよ」と言い放つのを聞いてかたはらいたく思われたことがあったが、彼にはボルヘスの分類のように感じられたのかもしれない。

Clark分類から10年ほどしてAckermanがunifying concept of malignant melanomaを提唱し、追随者にとっては「メラノーマはメラノーマ」ということになった(分久必合)。Ackermanはメラノーマを1つにまとめながら、一方で後天性色素性母斑を4つに分けたのはよく知られたところである(合久必分)。

最近では、BRAF遺伝子変異などの分子遺伝学的知見を加味したBastian分類が登場し、比較的Clark分類との対応がよいことが示されている。いわば、Clarkは肉眼と顕微鏡の所見のみで分子の差異まで見通した、ということになる。「意味ねーよ」どころではなかった。大量にものを見る者には、人には見えないものが見えてくる、そんなことを思わせる。

人工知能における深層学習(deep learning)では、膨大なデータを対象に多層的な学習を繰り返すことで、自律的に特徴量が生成されるという。多くの症例を診て新たな分類を提唱する熟練者の営為に似ているのではないか。初学者は往々にして性急に「意味」を求めがちであるが、違いのわかる者が抽出した概念にはじっくり向き合ったほうがいいのだろう、と思っている。

*ある百科辞典では動物を、(a)皇帝に帰属するもの、(b)芳香を発するもの、(c)調教されたもの、(d)幼豚、(e)人魚、(f)架空のもの、(g)野良犬、(h)この分類に含まれるもの、(i)狂ったように震えているもの、(j)無数のもの、(k)駱駝の繊細な毛の絵筆で描かれたもの、(l)その他のもの、(m)花瓶を割ったばかりのもの、(n)遠くで見ると蠅に似ているもの、に分けている(J.L.ボルヘス、中村健二訳：統審問。岩波書店、東京、2009)

梅林 芳弘

(東京医科大学八王子医療センター教授)